
はるかぜスピノフ

宝栄光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

はるかぜスピノフ

【Nコード】

N6787J

【作者名】

宝栄光

【あらすじ】

バレンタインデー。それは世界中の恋人が愛を確かめ合う日。

なら、俺たちは？

バレンタインデーキッス（前書き）

夢奏小瓶主活動として創作をおこなっている「はるかぜ」のスピ
ンオフ作品（番外編）です。

これといって注意が無い場合は本編の内容とはほとんど関係ありま
せんので、その辺りをご理解ください。

それでは、夢奏小瓶宝栄光が奏でる物語をお楽しみください。

バレンタインデーキッス

遥華 Seite

雨上がりの並木道、白い息を吐きながら二人で肩を並べて歩いていた。

雨と言っても、少し雪混じりの水分を多く含んだみぞれ雪のような雨。あたしはその冷たい水をわざと踏みながら彼の横を歩いていた。もう、二月も半ばというのに春の足音すら聞こえない今日この頃。神さまはもう二度度人間に春というものを与えない気が。

カーディガンの裾で両手を埋めながら吐息で指先を暖めながら彼の学生服を引っ張りながら付いていく。

「ねえ、鏡祐……」

「何だ？」

「……何でもない」

勢いよく踏み入れた水たまりの水がきらきら光る宝石となって辺りに散らばった。

「冷たい、寒い……」

ボンレスハムのような白いダウンジャケットまで羽織っているのに骨の髄まで堪える寒さ。

「寒い……」

七本松駅はもう目と鼻の先。だが、肝心の電車がこないのだから元も子もない。

ま、駅舎の中は暖房が効いていて暖かいのだけれど。

駅舎の中は多くの七高生でこった返していた。おそらく多くの七高生は舞泉方面まいずみの二両編成の電車に乗るのだろう。いつもならこの時間は少ないのだけれど、今日はそれ以上になっていた。おそらく箱詰め状態になるのだろう。

「何で今日はこんなに人が……。ただの平日だろ。それとも、今日は舞泉で何かイベントがあるのか？」

鏡祐が呟くのも無理はない。普段なら自転車通学をしている人や、まして反対方面の南港方面みなみなしの電車に乗る生徒まで電車を待っているのだから。

「イベント……。鏡祐、明日が……」

そこまで言って口をつぐんだ。

「ん？ 何？」

鏡祐はすぐに聞き返したが、「何でもない」と誤魔化した。

案の定電車内の人口密度は二百パーセントを超えていた。いつも座っているボックス席もすでに誰かに取られていた。空いている座席も一つもない。仕方なくあたしたちは入り口近くの僅かなスペースに立った。でも、周りはみんな男子ばかり。……一応女の子だからそういうのは気にする。

鏡祐はそんなあたしを守るかのようにその男子の集団とあたしとの間の壁となってくれた。こういうところが鏡祐のいいところなのだ。

でも、電車が激しく揺れ、あたしはバランスを崩しよるけ、鏡祐の壁から離れ、その男子の集団の中心へ投げ込まれた。皆きよとんという顔をしているが、いつ何をされるか解らないこの状況。とてもではないが楽しんでなどいられない。

「田中氏、田中氏、も、もしかしてこの方は我が部のアイドルっ！

少女人形（Maiden Doll）ではないですかっ！」

「確かに。まさか、こんなところに少女人形さんが現れるなんて奇跡ですな」

「ここ、これはレア価値ですぞっ！ 早速お持ち帰りして……、いや、その前に……」

……え？

「遥華^{はるか}? 遥華っ!」

くそ、あいつはどこに行った? こんな満員電車の中、何かあったらどうするんだよ。

俺は周りを見渡した。遥華の小さな身長が助け舟をだし、遥華の姿を確認出来ない。

電車内のざわめきのおかげで遥華の声は聞こえない。おそらく俺の声も聞こえていないんだろうな。俺の側から離れるなど言ったのに。まさか、人の流れに吞まれて途中下車したとか、そんな洒落た話ではないだろうな。

いや、あいつのことだ。それも十分にあり得ること。降りるべきか、降りないべきか。

いや、ただでさえドジでどこか抜けている奴だ。

と、俺は見た。小さな背の女の子が人に紛れて跨線橋の階段を人に揉まれて登っていた。顔や姿形まで確認は出来ないが、七高生であんなに小さな奴はあいつ以外にいないはず。

俺はあわてて車内から飛び出した。その直後に扉が閉まり、ぎりぎり間に合ったと胸をなでる。動き出した電車を眺めながら跨線橋へ歩く。

……え?

身体が凍り付いた。それは、単に寒さのせいではない。遥華が、遥華が。まだ車内にいたから。

それじゃあ、さっきの人は何……?

遥華は、なにやらオタクキーな人たちに囲まれて身動きがとれないでいた。

よりによって俺がさつき居たところの隣かよ。

遥華は半分なきそうな目で俺に何かを訴えている。すまん遥華。通り過ぎた電車を見送り、とりあえず俺は駅舎に向かった。果たして、俺が遥華と間違えたあの少女はいったい何者なのだろうか。

だが、もうそこには人影一つなく、俺の疑問を解決するには至ら

なかった。

遥華 Seite

……鏡祐、なんで降りてるの!? あたしはわけの分からない集団に囲まれて身動きがとれなくなっていた。これが巷で噂の集団痴漢というやつか……。

やつらはデジタルカメラを取り出すとあたしにそのレンズを向けた。肖像権の侵害。だけれども、やつらは、ファインダー越しではあるが、あたしに聞いた。

「あの一…、写真いいですか？」

「え？」

「写真、いいですか？」

「礼儀正しいのね。」

「ど、どうして……？」

「ひ、被写体に断りもなく写真を撮るなんて言語道断ですよ」

電車内でデジタルカメラを扱うことは礼儀にかなっているというのだろうか。

「あ、あたしの写真を撮って、何するの？」

「もちろん、デスクトップの壁紙にするんだな」

彼らは興奮気味にあたしの足から顔を見渡した。

やはり、危ない人にしかあたしは思えない。

「少女人形……。それは我がSF・ホラー研究部の空想上の伝説の少女っ！」

SF・ホラー研究部。聞いたことがある。名前活動からして怪しい団体。一時期とある団体により占領されていたとの噂のある学校屈指の奇行部である。ここ数年では自称オタクを名乗る生徒の憩いの場として機能しているのだとか。

「伝説の少女人形……？」

「そう、幸せを運ぶ伝説の少女人形っ！ 七年前の先輩がパソコン

の中に出現させて以来、たまに姿を現す伝説の少女っ！ 我々は未だ少女人形を見たことがなかったが、まさか、現実な少女^{リアル}だったとはっ！」

何、その伝説。

「その、少女人形って、そんなにあたしに似ているの？」

「もちろん！ その髪の色。その顔立ちその髪の長さ、ウエーブのかり具合。そしてその身長、胸の無さ！ 小学生のようなその姿こそ、我が部に伝わる伝説の少女人形に違いないのです！」

少し髪の長い人が暑く語った。

……小学生？

聞き捨てならん。

「何よ、小学生って！ あたしは立派な高校生よ！」

彼らは少しきよんとして、

「え？ 少女人形さんは小学生のレイヤー（コスプレをしている人）では……」

パチンっ！ そんな音が車内に響いた。あたしの平手が彼の頬にヒットした音だった。

「小学生って言うな！ あたしは高校生だ！」

彼らは少し怯えて、

「で、伝説とは少し違うなり……。伝説の少女はもつと優しくて……」

「伝説か何か知らないけれど、あたしはあたし、伝説は伝説！ 二次元と三次元を一緒にするな！」

「……うう。やっと少女に出逢えたと言うのに。ひどいなり……」

「ひどいも何もない。……ところで、伝説って何なの？」

S 研部員は互いに顔を見合わせ、田中と呼ばれた人が言った。

「バレンタインデー前日に現れ、翌日学校に行くと言った誰からも解らないチョコレートのプレゼントがあるという、我々男子が泣いて喜ぶという……」

……アホくさ。

気が付けば既に美海だった。

「あたし、帰るから」

無理矢理にS研の人たちをかき分けてホームに降りた。

ぶつぶつ文句を言いながら改札を目指した。でも、その前に誰かに肩を掴まれる。誰？ 何？

「君、可愛いね。さっきの平手見てたけど、やるね。そりゃあ、あんなオタクよりも俺らのほうがイケててかつこいいもんね」

チャラチャラした、大学生、いや、これは大学生でもない。こんな大学生は居るはずない。かといって、こんな真っ昼間からこんなことをしているということは、働いているというわけでもなさそうだ。親の金をむしり取りながら毎日遊びほうけるニートよりも墜ちた存在。

すぐに五人の男に囲まれてしまった。さっきのS研も五人だったが、少し訳が違う。(実はさっきも最初は怖かったのだけれど)明らかにこの人たちはあたしの身体が目当てなのだろう。ただのナンパでもなさそうだ。

「すみません、急いでますので」

「いいじゃん、俺らと遊ぼうぜ。カラオケおごるよ」

「本当に急いでいるんで」

あたしが無理にそこを通り過ぎようとすると、一人の男に腕を掴まれた。痛い。

「なあ、いいだろ？」

大胆にもほどがある強引なナンパ。ただ、誰一人としてこの物事に干渉しようという者は居なかった。やっかいごとに巻き込まれるのは嫌なのだろう。

当然男たちの力にかなうわけでもなく、あたしはそのまま引つ張られるように連れて行かれる。こういうときはいつも鏡祐が居た。いつも鏡祐が助けてくれた。鏡祐がいるからこんなことにならなかったのかもしれない。

鏡祐っ！

くそ、なんでこんなときに限って四十分も上り電車がないんだよ。愚痴を漏らしながら、先ほどとは対照的ながらんと空いた車内で一人そわそわ足踏みをしていた。

俺の苛立ちが周りに伝わったのか、俺の側を離れて座る者が目立つ。

「美海ー、美海ー、降り口は右側……」

長かった。いつにもなく長く感じた。おそらく時間は変わらないのだが、いつにもなく遅く感じた。

あれから遥華からの連絡もない。俺が電話してもメールしても返事はなかった。

ドアが開くと同時に慌てて飛び降りる。「掛け降り降車は危険です。すでにおやめください」と言われそうな勢いである。

そして、見つけた。遥華の姿を。先ほどの男たちも一緒だ。その中心に遥華は居た。

「おい、おまえら遥華から離れる！」

俺が怒鳴りながら拳をあげると遥華が慌てて言った。

「違う、違うの鏡祐！」

あげた拳をそのままの体制で制止させて遥華に聞き返す。

「どういうことだ？」

「この人たちはあたしに何もしてないわ。助けてくれたの」

助けた？ よく見れば男たちの顔には痣が出ていた。

「彼たちはあたしをナンパしようとしたチャラチャラした男から助けてくれたの。きつと助けてもらえていなかったら今頃あたしはどうなっていたか」

手をゆっくりと手を下げ男たちを見る。彼らは俺と視線が合うとなにかばつが悪いものでも見るように視線を逸らした。

「助けたってどういうことだよ。おまえたちにそんなことが出来る

形ではないと思うが……」

S 研究部員は少しむっとしたがすぐにその目を逸らして、
「お主の言うとおり。彼女は守れなかったのである」

遥華の言うことと矛盾している。遥華は守ってくれた。しかし、
彼らは守れなかったと言っている。果たして、両方の言い分はどち
らが正しいのか。遥華が口を開いた。

「守ってくれたのよ。そのせいでいっぱい、いっぱいこの人たちは
殴られた。血も出た」

S 研究部員は無言で遥華を見つめた。

「でも、実際助けたのは駅の係員です。我々はただ殴られることし
か……」

遥華は首を横に振った。

「違う。あなたが助けられなければ、……こう言うてはトゲ
があるけれど、あなたたちが殴られなければ駅の係員も来なかった。
だから、本当に感謝しているのよ」

彼らは少し沈黙した後、痛む頬をさすり、それでも謙遜に俺に彼
女をよろしくたのみます。と告げると、特急電車追い越し待ちのお
かげで七分ほど停車していた、先ほど俺が乗ってきた電車に乗り込
んだ。

遥華は、

「鏡祐、どうしてあるとき降りてたのよ！」

と文句を吐きながらも、終始何かを考えているようだった。

「ねえ、鏡祐、よりいたいところがあるのだけれど」

「寄りたいところ？」

「ナカマル」

「……昨日お肉の特売日で一緒に買いに行っただろう？」

「今日も行きたいの！ 昨日がお肉の特売日なら今日は……」

チヨコレートの特売日よ！ おそらくそう言っつもりだったのだ
ろう。しかし遥華はそのことを言わずに口を噤んだ。

遥華なら明日、チヨコレートをくれるだろうか。もしそうなら紫

美季以来の快挙である。

いや、毎日ご飯を作ってあげているんだ。それくらいはしてもらわないと。

「いや、やっぱり一人で رفتてくる。さっきみたいなことがないか、まだちよつと不安だけど、たぶんきつと大丈夫だから……」

遥華は笑顔で答えると、一人スーパーの方へ向かつて行つた。

俺は少し心配なのだが……。

それでも俺は「乙女心」というものを察し一人家に帰ることにした。

遥華 Seite

お店にはたくさんチョコレートを売っていた。お店で売っているのをそのままプレゼントするのは簡単だけれど、やっぱりチョコレートは手作りで……。

だけれど、今までそんな行事とは無縁だったあたしは手作りチョコレート作り方がわからない。確か、板チョコを溶かして、型にはめて？ そんな感じだったような気がする。

「はるにゃん、今日は常磐くんと一緒にじゃないのかい？」

あーやん
平原彩だった。

「あ……、いや、ちよつとね。ところでなんであーやんがここに居るのよ。あんた、舞泉よね？」

「いやあ、舞泉まで帰リたかつたんだけどさあ、途中で電車からあぶれちゃつてー およ、およよ？ っしてしている間にここに降りてたつて訳さ」

まったく、なんて能天気なのかしら。

「ところで奥さんはどうしてここに？」

まるで偶然お店で会つた主婦のドタバタ会議の仕草のように、左手を頬に当て、右手でゆっくりとそれでも大きく招き猫のように手招きをした。

「あたしは、明日のために」

「あーやんはにつこり笑うと、

「あらー、奥さんも？ わたしもそうなのよー。おほほほ。みんな、考えることは一緒ねー」

役になりきっている。その仕草態度。完璧だ。将来テニスを辞めた後、女優で生きていけるのではないだろうか。

「ということは、あーやんも？」

「あら、やあねー奥さん、明日が何の日か考えれば分かることじゃない」

彼女はあたしの肩をポンと叩く。少し痛かった。

「誰に渡すの？」

「そりゃあ、もちろん旦那だよ。それに、ここだけの話だぜ、はるにゃん」

意味がありそうな黒い笑みを浮かべてあーやんが声を小さくした。

「浮気……でもないのだがね、優ゆうや常磐とこまわくんにも渡そうとおもってんだー。えへへ」

「鏡祐に？」

「あいさ。あれあれ？ 常磐くんに渡すのはだめかな？」

「ダメ……じゃないけれども……」

「そっか、はるにゃんの王子さまだもんねー。常磐くんはるにゃんに優しいからなー」

あーやんはポリポリとその短い髪掻きき揚げた。

「別に王子さまなんじゃない！ 鏡祐は、その……、はじめての友達だから……」

「はじめての友達ね。はるにゃん、あたしは別にはじめての友達じゃないと言うのね」

「そんなこと言ってない。あーやんも友だち。鏡祐も友だち。でも、鏡祐はあたしをいっぱい助けしてくれるから……」

「……つま、はるにゃんが誰を友達と思おうと、誰を好きになろうと、わたしには関係ないしねえ……。おばちゃん、若い子の話に付

いていけなくてごめんね」

あーやんは両手を揃えて深々とお辞儀した。別にあたしはそんなこと思っていないのだけれど、あーやんのその一言が頭に残って仕方なかった。

まるで、遠回しに宣戦布告しているような。あーやんはわたしの仲のいい友だち。そう思っている。だけれど、どこか、自分でも彼女のことをわからなくなるときがある。それは、鏡祐なくてあーやんにあるもの。いつかは彼女に裏切られそうな、そんな不安感がたまによぎる。

「ところで、はるにゃん、チョコレート作ったことあるの？」

「……あるわけ……」

あーやんは「ふおっふお」と老人のような笑い方をすると、

「これだから最近の若い者は困る。わしが若い頃はこぞって好きな男子にチョコレートをあげたもんじゃ」

おじいさんなのか、おばあさんなのか。

「これ、そこのお嬢さん、よければわしと一緒に材料を買わないかね？ 手作りチョコレートの作り方も教えよう」

あーやんは笑顔で語りかけた。

「うん、おじいちゃんありがと」

あたしはそう答え、あーやんにチョコレート作成のいろいろなお菓子を学んだ。

「まず必要なのは、板チョコです。ミルクでもビターでもホワイトでも自分の好きなものを選べばいいんだよ」

あーやんは赤いミルクチョコレートの板チョコを十枚ほど買い物かごに入れていた。真似するようにあたしも同じのを同じ量だけ買う。

次に生チョコを作るのならキールはかせないね。知ってる？」

「知らない」

「お菓子用の洋酒だよ　　言い香りがするの。バニラエッセンスを

「買ってもいいね」

「バニラエッセンスってことは、バニラアイスに入ってる、あれ？」
「あれ？」。あーやんは少し首を傾げたがすぐ、

「そうそう、バニラの香りはバニラエッセンスを入れるからバニラアイスになるんだよ」

と教えてくれた。

「でも、入れすぎると苦くなるから、二、三滴が適量かな？」

あーやんは何でも知っている。

「次にホイップクリームね。もう、ホイップされているのと、生クリーム状態のとあるけど、どっちがいいの？」

「ホイップクリームってあの、ケーキに乗ってるふわふわのクリームでしょう？　こんな牛乳みたいなのがあなるの？」

彼女はクスリと笑う。まるで、はるにゃん知らなさすぎと言って
いるよう。

「じゃあ、試しにこっちでやってみなよ。泡立て器は持ってる？」

「うん。電動なら」

あーやんは苦笑を浮かべて、

「成金野郎め」

「そそ、そんなこと言われたって……」

自動って言っても使ったことは数えるほどもないのだけど。

「あと、ボールが二個」

「大きさが違ってもいい？」

「いいよ。むしろそっちのほうがいいかな」

「ほんとに？」

「本当」

「ほかにいるものは？」

「氷、もし、チョコホイップにするならココアパウダーが必要ね」

「チョコホイップ？」

「うん。ココア色のホイップクリームがあるでしょう？」

「うん」

「あれよ」

鏡祐が作ってくれるチョコいちごショートあのホイップクリームか。

「あたし、それが作りたい！」

「そう。じゃあ、ココアパウダーも買わないとね」

あーやんは生クリームとココアパウダーを購入。ついでにチョコレートを入れるラッピングボックスとメッセージカードを購入した。まねてあたしも同じように買う。ただの箱が六百円もするなんてとあーやんに言ったら、成金は黙らっしゃいと一喝されてしまった。なんか申しわけない。

「しょうがないじゃない。女の子は大変なのよ」

「大変でこんなにもお金がかかるのは……」

今日の合計シヨッピン金額六千八百円。

「だからバレンタインじゃないのかな？」

「……どうということ？」

「お金もかけて、愛情もかけて、だからバレンタインは女の子にとって特別なのよ」

「そっか」

確かにそうだ。バレンタインは女の子にとって特別。あたしは今まで経験したことがなかったけれど、それでも、雑誌やテレビでこのイベントが女の子にとってどんなに大切なのか知っている。

もし、鏡祐が受け取ってくれるのならあたしはあたしができる全てをした。と思う。

あーやんはあたしにいろいろなことを教えてくれた。

まずはホイップクリーム作りね。

大きいボールに冷水と氷。どうやらホイップクリームを作るには冷たくしないといけないみたい。それに、手早くかき混ぜて。あーやんは手動泡立て器だからこの作業がとても疲れるのだとか。あたしは楽だ。泡立ててはじめてすぐに粘りけがでてきた。この時点で

砂糖を混ぜる。鏡祐は甘いのも好きだけど、さっぱりした甘さが一番好きみたい。

だから砂糖は少なめ。いつしよにココアパウダーも適量混ぜる。一分ほど混ぜればいつも鏡祐が作ってくれるあれによく似たホイップクリームができあがった。

あたしが作るのはチョコレートケーキと生チョコレート。だから、生クリームは半分ほど残している。

次にチョコレートを溶かす。チョコレートを溶かすには湯煎でないといけないらしい。しかも、水が入るとチョコは溶けないのだから、キッチンペーパーで水気をよくふき取ってから細かく刻んだチョコレートを小さなボールに、その下にお湯を張った大きなボールを敷いた。

細かくするのは溶かしやすくするためだとあーやんが言っていた。あーやんの言うとおりチョコレートはすぐ溶けてトロトロになった。そこに生クリームを加え、リキュールを混ぜる。ハート型の型に流し込みこれで生チョコレートの完成。なんだ、以外に簡単に作れるじゃないか。

問題はここからだ。はたしてうまくスポンジを焼けるかどうかということ。今回はホットケーキを土台にチョコレートケーキを作ってみることにした。

これもあーやんの提案だ。

ホットケーキミックスにココアパウダーを混ぜ、焼いてみる。

……焦げた。鏡祐はあんなにきれいに焼けるのに。

焦げているのに中まで火が通っていないかった。ドロドロした半個体の液体があふれだしてきた。

何がいけないのか。IHクッキングヒーターの火力が強すぎたのか。

「ならば弱火で焼くまでよ」

と意気込んでじっくり焼いてみたけど鏡祐が焼いてくれるみたいにおいしそうな焦げ目はつかなかった。

なら、どうすればいいのかしら。

携帯電話を取り出し、鏡祐に電話をかけようとしたんだけど、鏡祐に渡すために作っているチョコレートケーキを鏡祐に聞いたのじや意味がない。

あーやんに聞こうと思っただけれど、これ以上女の子として負け続けるわけにはいかないと電話をソファの上に放り投げた。

できなければできるだけやればいいのだ。ただ、それだけのことではないか。あたしはもう一度ホットケーキミックスをフライパンの上に流し込んだ。

さつき弱火で焼いて失敗したのだから、最初は強火でだんだん弱火にしていけばいいのではないだろうか。

そう考えて火力をコントロールする。

フライ返しでひっくり返すのに失敗して形が崩れたけれど、ちょうどいい具合のホットケーキが焼きあがった。

これなら、大丈夫、いける！ あたしは意気込みそのままにホットケーキを焼くことにした。

鏡祐 Seite

男子諸君なら一度は、いや、少なからずとも五度くらいは期待したはずだろう。

靴箱を開けてみたり、机の中を見てみたり、ロッカーを開けてみたり、何気なくその話のそぶりを見せてみたり……。

だが、ないものはないのだ。あると思うな。ないと思え。あると思っただけで学校に行くと、決まって我々男子諸君は匙さじを投げるだろうと思う。どんなにがんばってもくれないものはくれない。くれるものはくれる。結局、今日という日に（男としての）人生の勝ち組と負け組に別れるのである。ちなみに、俺は幼稚園のころ紫美李しよじにもらったチョコレート正直に「美味しくない」と答えると、それ以降チョコレートをもらえなくなった。どうやら料理もしなくなったら

しい。そう考えると、紫美李の料理嫌いは俺が原因なのだろうか。
……ん？ 今日は何の日かって？ もちろん、今後の男としての
人生を占う大事な日、二月十四日聖バレンタインデーに決まってい
るだろう。

俺はチョコレートをお義母さんからしかもらえない悲しい男だ。
今年もあまり期待していないが、……あの娘こからもらえないかなと
少し期待しているところもある。

朝、いつも朝食を食べにやってくる遥華はやって来なかった。せ
つかく二人分の目玉焼きを焼いたのに。仕方ない。あいつの弁当に
これを詰め込んでいくとしよう。だいたい、来ないのならば連絡の
一つや二つくらいしてくれればいいのに。

歯を磨き、髪を整え、学ランを羽織りマフラーを着用して手袋を
はめる。外に出てみてびっくり。外は一面の白銀世界だった。道路
には悲しく誰かの足跡が無数に汚く残っているが、屋根や塀の上
に残っている雪はかき氷のようにふんわりと朝日を受けて銀色に煌め
いている。どうりで寒いわけだ。

美海川の河川敷も見事に雪化粧しており、そこで遊ぶ小学生の姿
を見ることが出来た。学校行けよ、遅刻するぞと心の中でつぶやい
てみるも、滅多に雪の降らないこの地域。もの珍しさにはしゃぐの
もよく分かる。もし、俺もあれくらいの年齢ならばああして雪合戦
をしたかもしれない。

駅に着くと紫美李が構内に置かれた石油ストーブを囲うように当
たっていた。

「おはよう」

「おはよう、鏡祐」

紫美李は、目を合わさずに言った。

「今日のはるちゃんは一緒じゃないのね」

「……風邪でもひいたのかな、今日来なかったんだよ」

「貴方を避けているんじゃないの？ はるちゃん」

「……それは、ないと思うけれど」

紫美李はしばらく眠そうに暖房に当たっていたが、思い出したようにバックを開けると、小さなハート型の箱を取り出した。

「……はい」

「……なにこれ？」

「見れば分かるでしょう！」

いや、俺もそれを一瞬考えた。十年間も幼馴染みにチョコレートをあげなかった彼女がなぜ急にチョコレートを俺に……？

「べ、別に……。あげたかったからあげただけよ。それ以上それ以下にも理由なんてないわ」

「そうか。まあ、なんだ、ありがとう」

「でも、美味しく出来たかどうか分からないから……」

……。まだ、あのときのことを考えているのか？ そりゃあ、あのときは溶かしたチョコレートに砂糖をさらに追加で混ぜていたから甘すぎて美味しくなかったわけで……。

「それでもないと思うぞ。紫美李が俺のために作ってくれたチョコレートだろう？」

「そんなことは……」

俺は早速その箱を開け、歪な形をした、おそらくハート型を型どったチョコレートを口の中に放り込んだ。程良い甘さ。噛むと中からチョコレートホイップクリームが溢れてきてお世辞ではなく本当に美味しかった。

「ちよ、鏡祐っ」

「美味しい」

「え？」

「美味しい。紫美李、これ本当に美味しいぞ。本当に、ありがとな」
紫美李は顔を赤くしたが、

「がんばって作ってよかった……。ホワイトデーは三倍返しよ」
「へいへい、分かりましたよ、お嬢さま」

俺がそう告げると同時、電車がホームにやって来た。予定よりも五分ほど遅れている。このダイヤの遅れもこの積雪のせいなので

あろう。子どもたちにとって嬉しい積雪も大人にとってみればそれはただの邪魔なものとしか思えないのである。

学校では紫美季からもらったチョコレート(三つ入っていて、あと二つ残っている)を隠しておかないといけないだろう。なんせ、あいつがいるから。

放課後、教室。

「鏡祐ー！ チョコレートもらったか？」

「いや。今年もない」

「そーか、そーか、それは可哀想な子だ。俺なんかほら、こんなにもいっぱい」

大橋健斗だ。健斗はスーパ一の袋を得意げにひっくり返す。大量のチョコレートが床に散乱した。

知っている。これ全て自分で買ってきたチョコレートだ。あるいは、女子にすがりにすぎたなけなしの市販チョコレートか。

「可哀想な常磐くんにはチョコレートを一つ分けてやるう」

「そりゃご丁寧にありがとうございます」

健斗は得意顔で好きなものを選びと俺に促した。俺が躊躇っていると、近くにあったマボロチョコレートを手にし、俺に手渡そうとした。

「おやおや、男の子同士で友チョコかいな？ それとも本命とか！？」

平原彩だった。

「ち、違う。これはただこいつが俺にチョコレートを強制的に渡そうとしてくるだけで……」

「まあまあ、愛は自由なんだぜ 誰にも止められないんだぜ」

「だから、違っつて」

健斗が口を挟んだ。

「ところで、テニス部のエース平原がどうしてこんなところに？」

「いやー、今日は何の日？ っふっふー」

「バレンタインデー！」

健斗が元気よく。

「そう、バレンタインデー！ よくできました」

よく出来ましたもなにも、皆知っている。

「いやあ、悪いなー。テニス部エース、レクジュリアンスプリンセス直々にこの俺に……」

バカか、こいつ。

「ほいさ、そりゃあ、わたしも女の子だから、男の子にチョコレートの一つや二つくらい渡したいんだよ」

そう言っただけ赤い四角い箱を取り出した。大きな茶色のリボンが平原の動きに合わせて上下に揺れている。

「ほいさ、常磐くん！ チョコレート」

「……え？」

「いや、さ、別に好きとかそういうのじゃないんだよ。いつもお世話になっているから、チョコレートってさ」

平原はぼりぼりと目の辺りを人差し指で掻くと、「それじゃっ、部活があるから！」そう言い残し逃げるように教室を後にした。手には先程平原から貰った、紫美李のよりも大き目の箱。隣には健斗何も言わずともこのあとどうなるか察しがつく。

「と〜き〜わ〜きよ〜すけ〜！」

恨みのこもった声で俺を呼ぶのは大橋健斗以外の何者でもない。

「この恨み被さんべきか〜！」

「いつ、俺がおまえに恨まれるようなことをした」

「今さっき」

「俺が平原にチョコレートを貰ったことか？」

「ああ、そうだ。それ以外に何がある？」

「おまえ、俺よりチョコレートたくさん貰っているだろう？」

健斗はちらつとスーパーの中の大量のチョコレートを見つめ、

「こんな市販のよりも手作りのほうがっ！」

「市販？ 君、さっき女子から貰ったと言っていなかったかな？」

「……自分で買ったんだよう。悔しくて自分で買ったんだよう」
健斗は自らの罪を認め俺にすがった。

「だからそれくれ」

誰がやるもんか。

「自分もチヨコレートを貰えるような努力をしるよ、健斗」

「いいじゃんかよー。おまえには愛風という常磐鏡祐大好き少女が傍にいるんだから絶対チヨコレート貰えるだろう？」

よく、皆は勘違いしている。愛風が俺のことを好きという。それは間違つてはいないが、恋人として好意を持ってくれているわけではないのだ。子どもが母や父を好きと思うように、祖父母が孫を好きと思うように。遥華の好きはそんな好きなのだ。

「貰えないよ。くれるならもうとくに貰っているはずだ」

遥華はちゃんと学校に来ていた。大きな手提げ袋も持っていた。

あの中にチヨコレートが入っているのだろう。女の子にその中チヨコレートを友チヨコとして手渡していた。

「それは無いね」

健斗がバカにした。

「いいや、貰えないよ」

これ以上大橋健斗という厄介ごとに巻き込まれることに気が引け、俺はいそいそバックを担ぎ教室を後にした。何気なく軽音楽部の部屋が気になり向かつてみることに。

ちなみに三年生は二月から家庭学習期間として学校には来ない。

よって、我が部も政権が先輩（橋枝真^{はしえまこと}）から俺にスイッチした。先輩が抜けて以降遂に軽音部は健斗と俺だけになってしまった。打ち込みで何とかいけそうなのだが、ギターのスペシャリストが抜けた穴は大きかった。

部室に向かつて歩いて行くと、遥華が廊下を歩いていることに気がついた。ちょうどいい。一緒に帰ろうと声でもかけてみるか。

遥華は俺に気がつかないのかすたすた部室棟に向かつて行く。軽音楽部の三つ奥にSF・ホラー研究部の部室がある。遥華はなんの

部活にも入っていない。どうして遥華がこんなところに？

よく、遥華は軽音楽部の部室には遊びに来る。だが、その軽音楽部の部室まで通り過ぎてしまつとは……。

俺が遥華を追いかけると彼女はよりによってS研の部室の前に立ち止まった。

……どうして……。

遥華 Seite

とんとん。ドアをノック。昨日の田中氏がドアを開けた。

「しよ、少女人形殿っ！」

S研部室はいろんなアニメのポスターや自分たちで描いたのだから。そこそこ上手い（とはいってもプロと比べるとまだまだ三流）の絵を置いてある。知っているのもあれば、知らないものもある。

田中氏のその言葉に昨日の人たちがぞろぞろと現われた。

「おおっ、少女人形が我が部へ何の用事？」

「別に……、はい、これ！ ありがたくいただきますい。あたしのチヨコレートなんて滅多に食べられるものじゃないのよ！」

彼らはめをぱちくりさせたが、

「キタコレー！」

と叫んだ。キタコレ？

「我々にも春が来ましたぞ」

「春？」

「あ、いえ、何でもございません。こちらの話……」

不思議に思ったが何もつっこまないことにした。

「でも、どうして少女人形が我らにチヨコレートを？」

「べ、別にどうだっていいでしょう？ 昨日のお礼よ、お礼！」

「お礼……ですか？」

「そう、お礼！」

彼らは顔を見合わせた。

「助けてもらったときはちょっとは……、かつこいいと思ったから……さ」

「え？」

「で、でも、別にあなたたちのことを好きになつたわけじゃないのよ！」

あたしは腕組みをして彼らを見上げた。

「……はじめて生チョコレートを作ったから美味しくできているかどうかはわからないけれど……」

彼らは、とんでもないと、ラッピングした箱をそれぞれ手に取つた。

「それじゃあ、それだけだから」

あたしは彼らに別れを告げてくるつとUターンした。鏡祐を探してみたけれど見つからなかった。先に帰っちゃったのかな？

鏡祐 Seite

俺にはチョコレート無しであいつらにチョコレートあり。

それは俺にとって耐え難いものだった。……いや、俺は遥華に何を期待しているのだ。

「鏡祐ー、鏡祐ー！」

遥華が俺を呼んでいたが、俺は遥華とは帰る気分ではなかった。

俺は遥華にどういう風に思っていて欲しいのだろうか。

遥華が行つたのを見計らって一足先に駅に向かった。昨日と同じ時間の電車。だけれど、昨日に比べて人は少ない。いつもと同じ光景が広がっていた。……いや、いつもと同じではないな。

男女が仲よさそうに寄り添っている、ふざけあっている、楽しく談笑している。

こんなにもカップルはいたか？

「……別に、俺と遥華はカップルじゃないし」

一人溜息をつき、電車が来るのを見守つた。俺は、何気なく遥華

と居たが、それはどうしてだ。

俺と遥華も、傍から見ればああいう感じだったのだろうか。

「いや、俺は遥華の彼氏でもないし」

いつも二人で乗るボックス席。今日は一人。

家に帰る。これまでも一人で帰るときはあつたじゃないか。それは俺の部活だったり、遥華が友達と遊ぶからであつたり……。それでも、遥華は俺の家にいつものようにご飯を食べに来た。

朝も来なかった。チョコレートだつて貰えていない。

今日は来るのか？

「……遥華は俺の彼女ではないんだぞ……」

「貴方を避けているんじゃないの？ はるちゃん」

紫美李の言葉が俺の脳裏によぎつた。避けられる理由、ある。

俺が昨日遥華の傍にいなかったから。

「……俺と遥華の関係つてどんな関係なんだ……？」

今日はバレンタインデー。だから俺も遥華のために遥華の好きなチョコレートイチゴショートケーキを作っている。

その、遥華が来ない。

しばらくし、時刻が六時半を過ぎていることに気がついた。

「ご飯作らないと……」

作るつて、何人分を……？ 今日は紫美李は来ない。遥華も来る

かどうか分からない。何人分を作る？ 一人分？ 二人分？

何気なく作った分量は二人分だった。

七時前。うちでは七時に食事というルールがある。それは、遥華や紫美李が一人で食べるのが寂しいから時間を決めてみんなで食べようと言ったから。

だから俺は六時半が過ぎていることに気がつき急いで支度に出たのだが、あんまり必要なかったかもしれない。

まだ七時には回っていない。あと十分ほどある。別に今日の料理を手抜きにしたわけではない。今日は寒いからうどんにしようとする朝から決めていた。冷凍うどんを湯がくだけだったからすぐに作り

終わった。

気分を紛らわすために先に食事することにした。うどんだからほんの五分で食事終了。身体はあつたまつたが、心はさめたままだつた。

俺が風呂の準備をしに浴室に向かったときだった。

『ピンポン』

チャイムが鳴った。

掃除中だろうが水を出しっぱなしだろうがそんなの関係ない。

ドアを開ける。遥華がむすつとした顔で立っていた。

「どうして先に帰るのよ、バカ」

「……いや、それは……」

「本当はあたしの家に来て欲しかったのに」

「え？」

「なんでもない。あんたのせいでせつかく作ったのに落としちゃったじゃない」

見ると手には大きなプレゼントボックス。

「……何、これ？」

「見りゃわかるでしょう！ チョコレートケーキよ！」

正直びっくりした。遥華が一人でチョコレートケーキを作って持ってくるなんて、思ってもいなかったから。

「びっくりさせようと思って。ほかの人とは違う特別バージョンよ。大きすぎて学校に持っていけなかったけれど、こつやって渡してあげれるからいいかなって」

「……」

「鏡祐、ちよつとはあたしを意識した？」

「誰が、おまえなんか」

本当はすごく気にしていた自分が居る。

「……そう、」

遥華は悲しそうに俯くと、俺にその箱を手渡した。素直にそれを受け取る。そのまさに刹那。

気がつけば俺と遥華の唇は重なっていた。突然の遥華の行動に俺は身動きすら取れない。

数秒後、唇を離れた遥華が目を逸らしながら言った。

「別に、なんでもないのでよ。鏡祐のために作ったチヨコレートケーキ、落としちゃったから……」

「そんなの、別に構わないのに……」

うつん。遥華は首を振った。「それに……」そう言いながら。

「……これで少しはあたしのことを意識したでしょう？」

「……ああ、少しな」

今日は聖バレンタインデー。世界中の男女が愛を誓い合う日

「あー、鏡祐、先にごはんを食べたでしょう！」

「腹が減ってたんだからしょうがないだろう。それにおまえ来るの遅すぎるし」

「ふんっ。来年は作ったげない」

なら、俺と遥華の関係は個の後どうなるのだろうか。

いや、どうなっても構わない。今まで通りの生活が遅れるのならそれでいい。俺は遥華の作った美味しいチヨコレートケーキを食べながらうどんをすすする遥華を眺めていた。

バレンタインデーキッス（後書き）

夢奏小瓶のホームページのために書き下ろした今回のスピノフ。
。スピノフ と本編はるかぜ は微妙にリンクしているように
していません。だから、今回の話も本編とは全く関係ない（多
少ある）話となっています。

さて、現実の話、宝栄光という作家は今年はチョコレートを貰え
るのでしょうか？ いや、貰いたいのには貰いたいですよ……。貰
えないんですよ、たぶん。……生チョコレートのチョコレートのケ
ーキの作り方とかを知っているという時点で何かおかしい。バレンタ
インデーなのに友チョコをあげる宝栄光はおかしい。きっと、おか
しい。

手作りチョコレートのいいけれど、チョコレートといえばやっぱり
ロイズのチョコレートですね。ロイズのチョコレートこそ日本一
美味しいチョコレートだと思います（手作りに勝るものは無いのだ
けれどね）。この前東京のおじさんがロイズ詰め合わせセットを送
つてきてくれたのだけど、んもう、止まらないね。どうすればあ
んなに滑らかで美味しい生チョコレートが出来るのか。宝栄光もあ
んな生チョコレートを作りたいのだけれど……。やっぱり、ロイズだ
から作れる業なのか？ そうなのか？ と、考えてみたけれど、じ
ゃあ、ロイズのチョコレートを溶かして手作りチョコレートを作れ
ば美味しいんじゃないかな？ いや、きっとそうだ。そうに違いな
い。でも、材料費高いし……。諦めよう。

そういえば、最近大芸大の友達とロフトに行ってきたけど、高い
んだね、箱。初めて知りました。うん、女の子は大変だ。

さてさて、そろそろ卒業シーズンですね。裏を返して入学シーズ
ン。春は出逢いの季節なんですか？ 別れの季節なんですか？ そ
んな疑問は置いておいて、宝栄光は卒業生代表なのです！ いや、

自慢できるものではないのですが。皆さんは卒業入学にあたってどう考えていますでしょうか？これを機に新しいことに挑戦してみるのがいいですね。

では、チョコレートを随時募集している宝栄光でしたー

2009年02月01日 宝栄光

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6787j/>

はるかぜスピノフ

2010年10月10日01時37分発行